

78回日本生理学会大会報告 京都

78回大会プログラム委員会 大森 治紀

第78回日本生理学会大会は平成13年3月29～31日に京都大学が当番校で、同志社大学・今出川および新町キャンパスを会場として開催された。事前登録者1,646名に当日登録者412名を加えた2,058名の参加登録者があった。当日登録者のなかでは194名が学生であり、全体ではおよそ30%に相当する606名が学生登録者であった。演題は特別講演4題、シンポジウム66件356題、ポスター発表686題を総計すると1,046題であった。

サイエンスとしての京都大会への評価は、それぞれの立場から議論していただくとして、本稿では企画と運営の面から78回生理学会京都大会を考察したい。京都大会の特徴は第1に、発表形式がポスターとシンポジウム発表であり、口頭発表による一般講演を行わなかったこと。第2にUMINを用いた電子登録を全面的に用いたことの2点である。この2点をはじめに考察したい。

1. 発表形式をシンポジウムとポスターとし、一般演題としては口頭発表を行わなかったこと。

平成(H)12年末に緊急に企画・提案された動物実験シンポジウムを加えると66件のシンポジウムが開催された。これは、生理学のカバーする広い学問領域に対応する形で公募により多数のシンポジウム提案が得られた結果である。シンポジウムでは企画提案したオーガナイザーを中心にそれぞれの分野における最近の進歩とともにそれぞれが抱える問題点を明らかにし、今後の展開の可能性を議論することを求めた。さらにシンポジウム毎に開催の趣旨を抄録集に掲載した。これによってそれぞれのシンポジウムが何を意図して企画されたのがより明確に聴衆に伝えられたと考える。シンポジウムにはオーガナイザーによって組まれた予定演題とともに公募による演題を加え

た。シンポジウム全体で120題程度の応募があり71題が採択された。応募が無かったシンポジウムが10件、最大12題の応募が集中したシンポジウムもあったが大半は2～3題の応募であった。公募演題の採否はシンポジウム・オーガナイザーが判断し、2時間のシンポジウムに組み込まれた。公募演題はある意味では不確定の要素でもあり、オーガナイザーにとっては公募枠を設けることは負担であったかもしれない。最大8題の講演を1つのシンポジウムに組み込むケースもあった。公募演題への応募に際しては、採択されなかった場合にポスター発表を行うかどうかの問いかけも行った。5件程度ポスター発表は行わないとの登録があったが、公募枠決定後プログラム委員会が個別に交渉して4題はポスターにまわった。シンポジウム企画の公募は6月末に締め切り、プログラム委員会による調整を経て、107件の提案から最終的に65件を採択した。この過程で趣旨の似かよった企画は提案者間での調整を依頼した。最大では4件の企画を調整して最終的に1つのシンポジウムとして採択した。大会案内第2報および大会ホームページには、それぞれのシンポジウム企画の要旨を掲載し、公募演題をシンポジウム毎に募った。UMINによる登録が締め切られる2ヶ月前をめどにオーガナイザーには予定講演者リストの提出を求めた。予定講演者には生理学会会員であることを求めなかった結果として、110名程度の予定講演者が非会員であり、シンポジウム・オーガナイザーも5名が非会員であった。こうした非会員の講演者・オーガナイザーには大会終了後の早い時期に講演への謝辞とともに日本生理学会への入会を依頼する予定である(H13年4月中に発送予定)。

さらに非会員への各種案内等の連絡は全てオーガナイザーに一任した。特に大会案内第2報、大

会への参加登録および抄録集の配布が重要な問題であり、全てをオーガナイザーに一任することで、大きなトラブルもなく済んだと考えている。また、シンポジウム会場ではOHPでの発表を基本として求めたが、スライドプロジェクターをはじめとして様々な要望をとりまとめた結果、全ての会場にPC・プロジェクターを準備することになり、時代の変化を感じた。こうした、AV機器のとりまとめもシンポジウム・オーガナイザーに依頼し、オーガナイザーからの申し入れを受けることで機器の準備をすすめ、こちらもトラブル無く準備できた。当日、多少のトラブルがPC機器の接続で生じたが大きな問題は起こらなかったと考える。

2. UMINによる電子投稿

78回生理学会大会は日本生理学会史上はじめて電子投稿によって抄録を受け付けた。東大病院に事務局を置くUMINを利用したものであり、著者のe-mail, TEL, FAXを含むすべての投稿情報をエクセル形式のファイルとして入手できることから、抄録集、索引の作成、細目、シンポジウムごとの演題の並べ替えなどが非常にスムーズであった。また、シンポジウムでの公募演題の選定はUMINから入手したファイルをオーガナイザーあてeメール送信することにより、スムーズに進んだ。78回京都大会の後UMINには既に生理学会大会用のアカウントが作成されたので、次年度以降も電子メールアドレスを含めて京都大会で使用したアカウントを使用することになる。UMINの入稿画面はH12年8月中旬に練習用画面の初版が完成し、その後使いやすさを求めて9月15日までUMIN側の担当者とやり取りし改訂を重ねた。また、UMINの作るページには少々わかりにくい表現があり、これを解説するためのページを間にはさみ、多少分かりやすくなったと考えている。

反省点としては、英語によるUMIN入力ページを設けるべきであった。これは、スタート時点

で注文することで簡単に実現することであったが、外国からの参加問い合わせがあった9月に改訂しようとしても手遅れであった。

さらに英文抄録集用の原稿の入稿もUMIN経由で行うべきだったと考える。

11月15日にUMINによる和文抄録集原稿の受付は締め切ったが、それ以降も電子メールで原稿が送られてきた。現実には締め切りを過ぎてもUMINの入稿画面をアクセス不能にはしなかった（実はこの原稿を書いているH13年4月でもアクセス可能）、本人からUMINへ投稿してもらった。したがって電子メールへの返事は期日を限って投稿を促すものとした。「まだアクセス可能なので明日17時までに入稿してください」など。これによって、第三者の手を介することによる単純ミスを回避できたと思う。締め切りを数分過ぎて入稿を諦められた方がおられたら、少々不公平になったと考える。

H13年1月になって、入稿したはずの原稿が実際には入稿されていないケースが5~6例発見された。これもUMINへの再入力を本人にお願いすることで処理した。また同一研究グループの複数発表において、ある第1著者が新規入稿を同僚の原稿を上書きする形で行って、先の入稿が消却されることも1件だけあった。UMINにアクセスできない人のために文書による抄録も受け付けたが、1件だけであり、この方も後日e-mailで原稿を送ってこられ、UMINへの再入力を依頼したので現実には全てが電子投稿で行われた。

UMINによる入稿画面では、ポスター発表、シンポジウム公募講演、シンポジウム予定講演、シンポジウム・オーガナイザー、特別講演などのカテゴリーの選択、シンポジウム名の選択、ポスターでは分類細目の選択などがあり、さらに著者の入力画面も延々続き、何らかの改善が必要と考える。

3. ホームページ

ホームページを作成し、大会案内、シンポジウ

ムの詳細案内，プログラムなどを随時掲載した．ホームページは体裁の点では専門業者（昔の印刷業者が多く参入している）に外注すべきである．しかし，個々の問題への対応には時間がかかると思われる．実際，変更点を第三者に口頭や文書で説明するのは，それ自体，自らキーボードを叩くより時間と労力を使う．身近にいる学生をアルバイトとして雇用し，研究室に来てもらって素早くリクエストを口頭で伝えることが有効であった．英文ホームページが役に立った．英語版は非常に簡単なものだったが，韓国，中国，カナダ，アメリカなどからの大会参加が4件あり，留学中の日本人研究者からの登録（少なくとも4件）にも役に立った．生理学会の国際化を考え，近隣の外国からの日本生理学会大会への参加を促す上でホームページを英語で作成することは重要と考える．

4. 大会の運営

4.1 会費

78回大会のもう1つの特徴は，学生の参加費を極端に下げたことである．生理学会会員である学生（院生および学部学生を対象とした）は1,000円，非会員の学生は2,000円とした．当日登録者412名のうち200名程度が学生であった．さらに2,000名強の登録者総数の中でも600名強が学生であったことはエンカレジングである．

さらに，外国からの参加者には生理学会への入会を求めず，非会員としての参加費10,000円を徴収するのみとした．

4.2 人員

大会の運営は会議業者に任せしたが，これまでの会に比べて相当に少ない人員で運営できたと考える．大会当日は受付，クローク，シンポジウム会場，ポスター会場に要員を配置したが，たとえばシンポジウム会場には2名のみであり，それぞれ照明とAV機器の管理に当たった．ポスター会場にも体育館会場と講義室会場とにそれぞれ1カ所のデスクを置き，ポスター発表者のリボン，ピン，両面テープなどを集中して管理した．シンポジウ

ム会場では，進行上のすべての業務をオーガナイザーに依頼し，計時係，スライド受付なども設けなかった．こうした状況でも，シンポジウムの進行はスムーズに行われた．

4.3 時間配分

シンポジウムは午前1件，午後2件をそれぞれの教室で開催した．午前の部は9時開始し11時に終了した．午後の部ははじまる2時までの3時間が，基本的にポスター討論の時間帯であった．ただし，その間にIUPS招致のための説明会（第1日），評議員会・総会（第2日）が開かれたので，ポスター討論・発表に支障があったことと思う．

午後の第1部のシンポジウムは2時開始4時終了，第2部は4時30分開始であり，30分の緩衝時間を設けた．この30分は微妙に有効であり，午後第1部の進行の遅れを吸収できた．

多くの講演者をそろえたシンポジウムでは2時間という時間配分では不足であったと思うが，午前の部，あるいは午後第2部の場合自主的に時間を延長したシンポジウムもあったようである．

4.4 1人1題の原則

京都大会ではシンポジウム発表，ポスター発表を問わず，第1著者としての発表は1人1題とするとの原則で処理した．これはシンポジウムのオーガナイザーにも適用し，自分自身で企画したシンポジウム以外のシンポジウムでの発表は控えてもらった．例外は，生理学会主催のシンポジウムとしての教育シンポジウムと若手の会のシンポジウム，動物実験シンポジウムおよび生理研連主催の特別講演に引き続く円卓討論会であった．複数のシンポジウムでの講演を希望された先生方もおられたが，この原則によってお断りしシンポジウムのプログラム作成が非常に単純になった．

5. 反省および提案

78回生理学会大会では，生理学会のカバーする領域を広げることを基本的な目的とした．そのために，生理学会の会員ではない研究者を積極的にシンポジウムに組み込んでもらい，英文のホー

ムページも曲がりなりにも立ち上げ、近隣の諸外国からの参加者を募った。いうなれば学際と国際ということを進めようとした。学際化は110名もの非会員が予定講演者として参加し、さらに150名程度の非会員の事前登録者がいた事からも、ある程度は進めることができたと考える。しかし、国際化は4名程度の一般登録にとどまり、もっと努力をすることができたと考えている。

5.1 国際化

国際化のためには2点の努力が必要と考える。第1には発表および抄録の英語化である。口頭発表を英語にする必要はないと考えるが、ポスターあるいはスライドなどの資料は英語表記にする価値はあると思う。ただし、ポスターにしても日本語の方が我々日本人にはわかりやすいのは事実である。そこで、英語表記を基本としながらも、表題は日本語を併記してはどうだろうか？さらに、抄録集も日本語と英語と2つ作るのではなく、英語の抄録集を基本とし、プログラムは別冊で日本語表記を付ける。そして、日本語のプログラムにも英語の表題を併記することができれば、日本人にも諸外国からの参加者にも役に立つ抄録集と生理学会大会になるのではないだろうか？

第2点はスポンサー制度の導入である。これは外国籍の参加者を対象として生理学会会員がスポンサーとなり日本生理学会に入会しなくとも学会発表を認める制度である。この場合も参加費は徴収しスポンサーの権利を持つのは学会評議員が適当であろう。78回大会では当番幹事の責任で同様の措置を講じたが、これを制度とすることで近隣の外国からの参加を促す手だてになりはしないだろうか？

5.2 学際化

学際化を進めるためにも、他学会への参加の呼びかけをより強力に進めるべきであると考え。生理学会に関連した他学会により企画されたシンポジウムがあってもよいと思う。

さらに、教育シンポジウムを再編して、生理学の多岐にわたる学問分野の1つ1つをテーマとし

た、モデル講義を毎年開催することも、医学に関連した他領域からの参加者を増やすことのできる可能性がある。それぞれの分野におけるコンセンサスをモデル講義の中で紹介することは、生理学を教育科目とする医療技術大学関連の先生方には非常に役立つことと思うし、我々生理学者が自分の専門でない分野を学生に教えるときにも役に立つであろう。ある意味ではサービスであるけれども、教育シンポジウムの1つの形として必要ではないだろうか？こうしたモデル講義の中ではわかりやすい選りすぐったイラストレーションを示し、そうしたイラストをCD-ROMの形で提供できるようにすれば、教育にすぐ役に立つだけでなく、将来的には美しいイラストを集成した啓蒙書に仕上げることもできると思う。これは高校生、医学部以外の学生を対象とする生理学の啓蒙書にも発展する可能性があり、生理学のすそ野を広げる可能性があるのではないか。

5.3 生理学会の活性化への提案

生理学会は3,500名の会員を擁し、JJPおよび日本生理学雑誌をもつ伝統のある学会である。こうした学会でありながら必ずしも元気が無いと昨今思われているのも事実である。この傾向を絶ち、若い研究者が研究発表のメジャーな場と認識するような学会に再びするためには、年次大会を如何に活性化するかが最重要課題である。78回京大会は多くの参加者を集め、多くの研究発表が行われ、会場では若い研究者・学生も多く、活発な発表と討論がなされて、それなりの成功を収めたと考える。学問の場としての活力を感じることができたのは、他学会からの参加者が増えたことと、最近生理学会には参加しなくなった会員を呼び戻すことができたこと、そして何よりも総参加者の30%程度が学生であったからであろう。こうした今までにないポピュレーションの参加者を惹きつけることのできた最大の要因は、数多く開催したシンポジウムであり、それぞれのシンポジウムの場でそれぞれの学問の方向性を明確に出してくれたオーガナイザーと講演者の力であったと思

う。

78 回京都大会方式の網羅的なシンポジウムはおそらく 3 ~ 5 年に 1 度は開催し、それぞれの分野の総括、問題点の認識および将来への展望を討議するために価値のある大会開催方式と考える。その間の年には学会として継続性のある考え方でシンポジウムを企画するべきである。そうした考えから、学際化と国際化を念頭に置き、さらに 3 つの方針を提案したい。

1. JJP の活性化をも視野に入れ、JJP と密接に関連したシンポジウムを開催する。JJP の編集委員がオーガナイズし、JJP に review として掲載することも考えられることである。
2. 大会の分類細目毎に何年かに 1 度シンポジウムの開催を課す。これにより、分野ごとの現状のまとめと、将来展望を促し自己評価にもつながり、学問分野内での改革を勧めることを期待したい。
3. 特定領域関連のシンポジウムを開催する。既にある特定領域研究では研究発表の場とし、さらに学会として新しい特定領域研究を立ち

上げるためのシンポジウムとする。これは IUPS 招致に向けて、次の世代の生理学の中心となるべき分野の発掘 選定を目的として開催するシンポジウムにもなるう。

最後に、今回の 78 回京都大会では e-mail を有効に活用した。シンポジウムの調整など e-mail がなければこれほどスムーズには進まなかったと考える。今後とも e-mail およびホームページを活用することで、より一層優れた大会運営を少ない人員と労力でできると考える。

謝辞：プログラム委員会のメンバーではあるが、京都大学医学研究科、認知行動脳科学領域の加藤伸郎助教授が今大会の運営において大きな貢献をしたことを特に記載し感謝したい。加藤氏はホームページを立ち上げ、UMIN の利用を具体化し、抄録の作成、大会運営の実務において努力し、京都大会を実現させた最大の功労者と考えます。同時に今大会の実務を行ってくれた JCOMM にも感謝します。